



Title	講師派遣型インターンシッププログラムの開発
Author(s)	宮原, 啓造
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2018, 22, p. 19-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67903
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

講師派遣型インターンシッププログラムの開発

宮原 啓造*

要 旨

国内外に於いて教育的・社会的観点から学生のインターンシップ活動が重要視されている。本稿では、本学で受け入れる外国人留学生向けに新たに開発したインターンシッププログラムに関し、その概要、開発経緯、運用状況、効果および展望について述べる。

【キーワード】 インターンシップ、講師派遣、語学学習

1 はじめに

インターンシップとは「学生が在学中に一定期間、企業やNPO等において、自らの専攻や将来のキャリアに関連した就業を体験すること」である（文部科学省 2017）。表1に示すような意義と効果を念頭に、学生は就業体験を通じて自らの目的を達成することを目指し、またインターンシップを運営する企業および大学は、産学連携による人材育成の実現と、学生を媒体とした情報交換の活性化等の効果を期待して活動する（三浦 2016）。インターンシップには「セミナー受講型」「見学・同行型」「問題解決型」「実務補助型」「実務遂行型」など様々な形態があり（文部科学省 2015）、直近のサーベイデータによれば、日本の大学に通う学生のうち30.5%の者がインターンシップを経験し、その多くは「大学3年生の夏季休暇期間に1日～1週間程度、表1に示したような意義・効果を期待しつつ、製造業あるいは金融保険業の会社で実施される、見学あるいはワークショップへ参加している」ものと考えられる（表2）。

これらの国内向け動向と並行して、世界規模の人材育成・外国人の日本への就職推進等という複数の観点から、受け入れ留学生向けインターンシッププログラムの開発と、その充実が期待されている（文部科学省 2016）。本学においても、本学と学生交流

協定を締結している海外の大学（以下、協定大学）から寄せられた要望をきっかけとして、本学が受け入れる留学生を対象としたインターンシッププログラムを開発し、2016年度から運用を開始した。同プログラムにおいて留学生は、その語学能力を活かした「英語講師」として企業各位へ派遣される。学生が企業で就業を体験するという意味では一般的なインターンシップの形態であるものの、University of California (2017) で示されているESL-Program等と同様に、その業務内容が企業各位の本業と直接は関連しないという点に特徴がある。以下本稿では、同プログラムの概要、開発の経緯と運用の状況、さら

表1 インターンシップの意義・効果

学生にとって	ビジネスマナーの習得 自身の適性を把握 希望業界の現状を把握 自身の教育・研究への寄与 就職活動への寄与
企業にとって	アイデアの発掘、導入 社内の活性化 採用活動の一環 人材育成を通じた社会貢献 大学との情報交換、連携強化
大学にとって	キャリア教育の一環 専門教育充実への波及 企業との情報交換、連携強化

*文部科学省 (2015, 2017)、北九州地域産業人材育成フォーラム (2012) より作成

* 大阪大学国際教育交流センター准教授

表2 インターンシップの形態

期間	1日 ……全体の47.0% 1週間未満 ……同、44.0% 2週間未満 ……同、19.5% 1ヶ月未満 ……同、8.0% 3ヶ月未満 ……同、4.5% 3ヶ月以上 ……同、3.6%
内容	通常業務を主体的／補助的に遂行 課題解決型のプロジェクトを遂行 特定テーマに関するワークショップを実施 企業見学および単純作業の体験 社員の業務遂行に同行 企業講師によるセミナーを受講

* 文部科学省 (2015, 2017)、北九州地域産業人材育成フォーラム (2012) より作成

に教育的効果と将来の展望について述べる。

2 プログラムの概要

2016年に開発し現在運用中のインターンシッププログラムの構成を図1に示す。協定大学から派遣されて本学で受け入れる留学生の中で本プログラムへの参加を希望する者は、渡日前にCurriculum VitaeおよびStatement of Purposeを提出する。これらの書類は本学および企業各位が確認する。審査を経て受け入れが決定した学生へは協定大学を通じて合格を連絡する。学生は渡日後、語学教育実施に必要な能力を養成するためのワークショップを受講し、授業計画と教材を準備する。講師 (Mentor) として企業各位へ派遣された学生は、その社員である学習者 (Mentee) を対象とした英語授業を実践する。

このようなプログラムを構成するにあたり、当センターで現在運用中の「HELP!」システムの枠組み (Miyahara 2015) を基盤として活用した。同システムにおいては、研修受講後の留学生Mentorが本学一般学生であるMenteeとペアを組んで個別対面学習 (Mentoring) を実施する。Mentoringは1.5時間 (1コマ) を単位として、3ヶ月の期間中に8コマ分実施することを標準回数として設定している。これは事前研修 (ワークショップ受講, 担当教職員との面談等)、教材準備、事後課題 (報告書作成) 等と総合して45時間程度の業務量となることを想定したものである。本プログラムにおける英語授業においても同様に、毎週1コマ×8回分を標準回数と設定した。ただし授業形式は、1対1の対面学習 (上述の「HELP!」と同様) や複数Menteeを対象としたグル

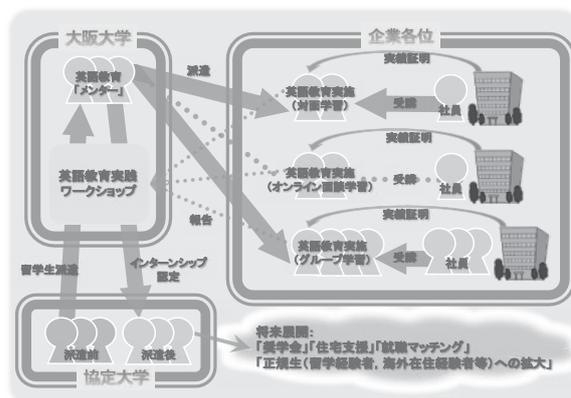


図1 開発したインターンシッププログラムの構成

ープ学習など、企業各位の要望に応じて個別に設定した。また必要に応じてオンライン環境 (Web 経由の画像付音声通話) を用いた遠隔面談学習を併用できる体制を整えた。

Mentor/Menteeの両者は、授業各回の実施記録等のデータを、本学で運用中の留学プログラム用e-portfolioシステム (Miyahara 2015、近藤 2016) へ随時アップロードする。その内容を確認しながら本学担当教職員は留学生へ適切なフィードバックを与える。またMentorはプログラム完了時に最終報告書を作成してアップロードする。これらのシステム上に蓄積されたデータはMentor/Menteeを始めとして企業各位や派遣元大学と共有することが可能である。そして本学担当教職員は、全てのデータを総合してMentorの成績を評価すると共にインターンシップ実績を証明する書類を発行する。

3 開発の経緯と運用の状況

本プログラムは、本学の協定大学である Monash 大学から寄せられた要望をきっかけとして開発された。同校の International Business コース (学士課程) では、そのカリキュラムに“Study abroad or Industry placement Option”として、留学とインターンシップが組み込まれている (表3)。その留学先としては、北京大学 (中国)、成均館大学校 (韓国)、Monash 大学マレーシアキャンパス、および本学が指定されている (Monash University 2017)。それぞれの大学において正規交換留学生として滞在して、各国の経済・言語・文化等を英語で学び、取得した単位を互換するシステムが整っており、New Colombo Plan (Australian Government 2017) をはじめとする各種奨学金の対象

として認定されている。

本学も2016年度から同コースの学生若干名を人間科学部英語コース (Osaka University 2017) へ受け入れることとなり、それに伴い日本国内でインターンシップが実施できるようにとの要望が寄せられた。それに対応するために、前述した「HELP!」システムの枠組みを活用して本プログラムを開発した。Monash 大学からの正式な要望を受領したのは2016年7月であったが、それに先行する形でプログラム案 (図1の原案) を基に事前検討していた企業各位複数社からインターンシップ受け入れ可の内諾を頂いた。この時点での懸案は「安全」と「守秘」に関する項目であったが、前者については、受け入れ時オリエンテーション等を通じた指導を行うと共に教育研究活動向けの保険 (日本国際教育支援協会2017) を準備し、また後者については必要に応じて誓約書を取り交わす体制を整えた。

インターンシップ参加希望学生から受領したCV等の必要書類を企業各位および本学担当者が確認した後、受け入れ学生を決定した (2016年度3名)。学生は9月末に来日して10月には前述の講師養成ワークショップを受講して授業計画と教材の準備に入った。並行して、本学教職員が面談を通じて本プログラムの目的と実施手順等について再度詳細に確認すると共に、日本における基本的なビジネスマナーを解説した。さらにインターンシップ開始に先立ち、派遣先企業各位・学生・本学教職員の3者が打ち合わせる機会を設けた。授業は11月から1月までの3ヶ月間に、ほぼ週1回のペースで継続的に実施された。2017年度もほぼ同様のスケジュールで運用され

表3 Monash 大学 International Business コースのカリキュラム

Tri- mester	01	02	03
Year			
1	Business law Introduction to management Accounting for managers Microeconomics	International business Marketing theory and practice Foundations of finance Business statistics	Accounting information systems Macroeconomics Managerial communication Buyer behavior
2	International management International financial management Trade finance and foreign exchange Macroeconomic and monetary policy	Study abroad or Industry based learning or elective units from other faculties	Data visualization and analytics Current issues in business International trade law Business in Asia

* Monash University (2017) より作成

ており、これまで延べ15名の Mentee に本プログラムへ参加頂いている。

4 プログラムの効果と展望

授業各回の実施記録および最終報告書から Mentor のコメントをまとめて表4に示す。この表から、本プログラムが様々な学習トピックを Mentee 各位へ提供できたこと、およびプログラムの実施を通じて、Mentor が様々な学びと気づきを得られたことを確認することができた。

またプログラム終了時 (2016年度) に Mentee から提出されたアンケートにおいて多く見られた意見を表5に示す。表から「主にコミュニケーション能力の伸長を期待していたこと」「講師との意思疎通が難しいケースがあったこと」「互いに慣れてきたところで実施期間終了となってしまったこと」「期待していたスキルを全て獲得できた訳ではなかったこと」等の状況を読み取ることができた。「授業開始前に到達目標を講師と相互確認すること」の重要性も指摘さ

表4 Mentor が作成した授業実施記録および最終報告書 (抜粋)

授業のトピック	<ul style="list-style-type: none"> • 日常会話 • よく使うフレーズ • ビジネス英語 • アカデミックライティング • プレゼンテーション • 語彙 • 文法 • 文化の違い • 働き方の違い • 教育制度の違い • 大学生生活の違い
学びと気づき	<ul style="list-style-type: none"> • とても楽しく意義ある時間を過ごすことができた • 多くの親切な方々と出会えて感謝している • 新たに人間関係を構築することを体験できた • 自分の強み/弱みを知ることができた • 日本の文化 (特に会社における) を認識できた • 日本で暮らして行ける自信がついた • シャイであった方が自信を持って表現できる方へドラスティックに変わるところを見ることができた • 難しいコンセプトを表現するために何とかフレーズしようと努力する方を見ることができた • 本当の仕事は「語彙/文法を説明することよりも「個々に適した英語の学び方を見つける」ことだと気づいた

表5 Menteeのアンケート結果(抜粋)

授業の形態	<ul style="list-style-type: none"> • 授業時間(1コマ/週)は適切 • 実施回数はもっと増やしたい
実施前に期待していた項目	<ul style="list-style-type: none"> • コミュニケーション能力(聴く、話す)の向上
期待通りに習得できた項目	<ul style="list-style-type: none"> • 学習者個々で様々
期待通りに習得できなかった項目	<ul style="list-style-type: none"> • 話す能力
授業を通じて困ったこと	<ul style="list-style-type: none"> • 講師の話すスピードが速い • 講師が日本語を話せない
改善のアイデア	<ul style="list-style-type: none"> • 事前に目標を明確化することが重要

れており、これは「講師の話すスピードが速い」等の項目と併せて、Mentor側の留意事項としてインターン開始前の指導項目に組み入れた。できれば可能な範囲で授業回数を追加したいところではあるが、週1回の日程を設定するに際しても、学生の都合(通常授業スケジュール)を優先させて頂いているのが実状である。また学生の「挨拶ができる程度」である日本語能力に関する種々の不都合に関しても企業各位のご好意に頼って克服して頂いている状況であり、これらはまとめて今後の検討課題としたい。

本プログラムの開発時に協議頂いた企業各位に於かれては、インターンシップ生を受け入れて下さった各社を含めて、既に全社で、それぞれの英語研修プログラムが確立/運営されている。本プログラムは、語学力実践の場を身近な環境で提供できるという意義を持つものの、その安定的な運営が求められる。そのためには、プログラムへ参加するポテンシャルの高い学生を、さらに人数を拡大しつつ持続的に確保することが必要である。その意味で、協定大学数の増加と共に、本学で受け入れる正規留学生(学部生/大学院生)や、逆に海外派遣留学経験/海外在住経験を持つ一般学生へと、その対象範囲を拡大して行くことが望まれる。

謝辞

本稿で述べたインターンシッププログラムの開発および運用にあたり、川崎重工業(株)、グローリー(株)、住友電気工業(株)、(株)西島製作所、(株)モリタホールディン

グス(会社名五十音順)各位に的確なご指導および暖かいご協力を頂いた。ここに記して感謝の意を表す。また同プログラムの円滑な運営は本学国際教育交流センター遠藤氏の献身的なサポートに依るところが大きい。ここに記して敬意を表す。なお、本研究の一部はJSPS科研費JP26590212の助成を受けた。

参考文献

- 北九州地域産業人材育成フォーラム(2012)「地域連携型インターシップガイド」.
- 近藤佐知彦(2016)「留学ポートフォリオに関する報告—阪大スタイルのeポートフォリオ設計—」『多文化社会と留学生交流』, 第20号, p.55-63.
- 日本国際教育支援協会(2017)「学研災付帯学生生活総合保険」[Online]. Available: <http://www.jees.or.jp/gakkensai/inbound.htm>. [Accessed: 29-Jan-2018]
- 三浦一秋(2016)「インターンシップの教育効果についての分析—学習意欲向上効果と就業意識向上効果の観点から—」『インターンシップ研究年報』第19巻, pp.1-10.
- 文部科学省(2017)「インターンシップ推進のための課題及び具体的効果・有用性に関する調査研究」.
- 文部科学省(2016)「外国人材活躍推進について」.
- 文部科学省(2015)「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」.
- Australian Government(2017)“The New Colombo Plan Scholarship Program,” [Online]. Available: <http://dfat.gov.au/people-to-people/new-colombo-plan/scholarship-program/pages/scholarship-program.aspx>. [Accessed: 29-Jan-2018].
- MIYAHARA Keizo, et al. (2015) “ICT Systems for Student Mobility Programs in Tertiary Education,” *Proceeding of the IEEE International Conference on Teaching Assessment and Learning for Engineering (IEEE TALE2015)*, p.63-66.
- Monash University(2017)“International Business,” [Online]. Available: <http://www.monash.edu/international-business>. [Accessed: 29-Jan-2018].
- Osaka University(2017)“The Human Sciences International Undergraduate Degree Program,” [Online]. Available: <http://g30.hus.osaka-u.ac.jp>. [Accessed: 29-Jan-2018].
- University of California(2017)“Teaching English Abroad (ESL),” [Online]. Available: <https://icc.ucdavis.edu/find/international/teach.htm>. [Accessed: 29-Jan-2018].